

# 田口ランディ「クリスマスの仕事」における教材性の検討 —文学作品の基本構造・伏線・対比の方略と重ね読みを活用した小説の学習指導の提案—

中野 登志美

## 1. 「クリスマスの仕事」の読みにおける問題の所在

田口ランディの「クリスマスの仕事」は2005年度の『中学校 国語2』（学校図書）の新教材として選定されて以来、学校図書の『中学校 国語2』に採録されている作品である<sup>1</sup>。『中学校 国語2』に採録された田口ランディの「クリスマスの仕事」の初出は幻冬舎の「Web マガジン幻冬舎」（vol.18、2000年12月15日号）である。学校図書のホームページを参照すると、「書籍に掲載する際に加筆されており、インターネット版とは異同がある。また教科書掲載にあたり作者自身による加筆訂正がある。」という記載があり、教科書教材として採録されるにあたって加筆訂正されていることが明かされている<sup>2</sup>。

「クリスマスの仕事」の先行研究は、学校図書から刊行されている指導書以外では「自分らしさ」という観点から学習指導案を論じている村山太郎<sup>3</sup>、授業報告をもとに本文の注釈を行っている門澤功成の論考<sup>4</sup>、大学生を対象にした模擬授業の指導を踏まえ授業実践に役立つことを目的にして本文の読解を行っている原田正彦の論考<sup>5</sup>がある。先行研究は多くないものの、「クリスマスの仕事」は学習指導案や注釈といった観点からの考察が行われている。これら3つの先行研究に共通しているのは、授業実践をもとにして論じている点である。言い換えると、田口ランディの「クリスマスの仕事」は一見、学習者たちにとって読みやすい文章であるのだが、作品の内容が植物状態の患者たちのいる「人生の最期の場所となるための病院」の中で起こった出来事が基盤となっていて、学習者に死生観や人生観を問う作品となっている。それが中学2年生の学習者の指導を困難にしているのである。村山太郎は「クリスマスの仕事」を読んだ学習者の感想文は次のようであったと報告している<sup>6</sup>。

- ・「僕」は心から音楽を楽しんで演奏しているんだと思った。そして、そんな演奏を聞いたから、植物のような状態のマリコさんも涙が出たのだ。（中2・女子）
- ・植物のような状態のマリコさんが涙を流したところで音楽って凄いなと感じた。（中2・男子）

学習者の感想文について、村山は「学習者の初発の感想を見ると、書き手の問い掛けは全く視野に入らず、むしろこの話を『ひたむきな演奏が人に思いを伝える』物語として見ようとするのが分かる。」<sup>7</sup>と言及しており、次の点を問題視している。

教科書版「クリスマスの仕事」は先のお話の型（稿者注・ひたむきな演奏が人に思いを伝える）で読もうとしても十分そう読めてしまう。しかし他方で、教材テキストにも描いてある婦長さんのこだわりや患者さんとの対面で得た僕の直截な感触やその後の僕の変化といった、それこそ本教材テキストの特徴的な叙述は学習者の既視感に満ちた読みの過程で問題にもされないのである。<sup>8</sup>（傍線・稿者）

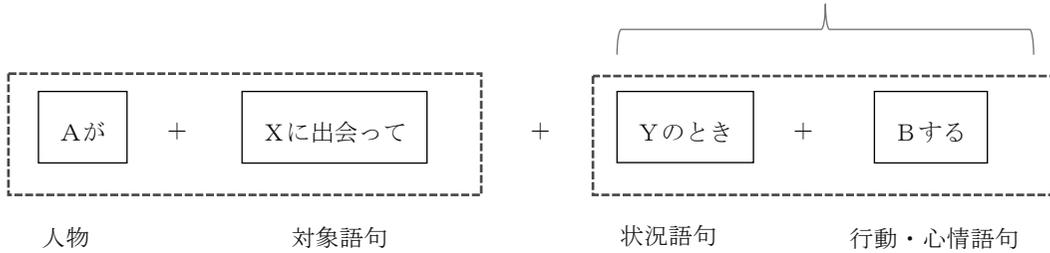
村山が言及しているように学習者たちは「クリスマスの仕事」を音楽の素晴らしさが人に感動を伝える作品と捉えていて、「婦長さんのこだわりや患者さんとの対面で得た僕の直截な感触やその後の僕の変化」に気づいていない。実は作者が問うている死生観や人生観まで考えを巡らしていないのである。さらに言うと、この教材は「僕」が変化するきっかけとなった出来事を独特な表現で描出している点に特徴が見いだせるのに、学習者たちは「僕」の変化について少しも言及していない。つまり、学習者たちの感想文に書かれているような音楽の素晴らしさが人に感動を伝えるという読みは、表層的な読みに留まっているといえる。指導書が目指している「一期一会」とも言えるそれぞれの生のベクトルが交差するさま<sup>9</sup>（傍点・稿者）や、村山が目指している「『僕』の変化」を学習者たちは読み取っていない。学習者たちは「僕」とマリコさんの関係性だけを焦点化したために、音楽の素晴らしさが人に感動を伝えるという表層的な読みになってしまう。「僕」はマリコさんやセントマリア病院の婦長さん達との出会いを通して、音楽や生き方に対する見方が変わったことを考慮すると、この作品は「僕」とマリコさんだけではなく、マリコさんと婦長さん、「僕」と婦長さん、そして「僕」と音楽との関係性にも着目して読み進めなければならない。これらの点に注意を向けながら学習者たちを指導する必要があるだろう。吉田新一郎は「今日日本社会で求められている」のは「自らが考えて自分なりの意味をつくり出していくこと」<sup>10</sup>であると指摘している。吉田が指摘しているように、「自らが考えて自分なりの意味をつくり出していく」ように学習者を育てることは国語科において大切な指導であろう。しかしながら、「クリスマスの仕事」の場合、学習者たちは音楽の素晴らしさが人に感動を伝える作品であるという枠組みにはめ込んで自分なりの意味をつくり出しているところに、この作品の読みにおける問題点が見いだせる。「クリスマスの仕事」の骨子を捉えきれていないのである。そこで本稿は、学習者の読みの感想や反応を出発点にして、表層的な読みにならないために「クリスマスの仕事」の中で着目しなければならない大切なところを論じるだけでなく、読みを深めるための方略を活用した小説の学習指導法を提案していく。その上で、この作品の教材的価値について検討していきたい。

## 2. 文学作品の基本構造を活用した「僕」の変化についての指導

「クリスマスの仕事」は作中人物である「僕」がクリスマスイブの出来事を回想する一人称の語りの形式がとられている作品である。この作品は結末部分で「やっぱり神様はいるんだ。僕はそう思う。メリー・クリスマス。」と語っている「僕」は「無信仰」であったにもかかわらず、神様の存在を確信している。ここに「僕」の変化を見ることができる。「クリスマスの仕事」の語りの特徴は「僕」が作中の登場人物であると同時に語り手でもある点であろう。F・シュタンツェルは「自叙伝風一人称小説の形式で語られる物語は、言うなれば<体験する私>と<物語る私>とが心理的統合を成就するまでのプロセスを、歩一歩得心のいく形で描いた物語である」<sup>11</sup>と指摘している。また、F・シュタンツェルが「一人称形式で語られることはすべて、一人称の語り手にとってなにかしら実存的に有意味な事柄である」<sup>12</sup>と指摘しているように、「やっぱり神様はいるんだ。」と「僕」が神様の存在を確信するに至るまでが「心理的統合を成就するまでのプロセス」であり、そのプロセスを「僕」は心に残った体験として回想しつつ語っている。

一人称の語り手が「なにかしら実存的に有意味な事柄」を語っている物語内容について、浜本純逸は「主人公（A）が、何か（X）に出会うことを通して大きく変容・変貌していく（N）というふうになっていて、その過程を描いたのが文学作品」の「基本」<sup>13</sup>であると指摘している。浜本の文学作品の基本モデルを表したのが次の図である<sup>14</sup>。

「変換点」にあたる部分



「クリスマスの仕事」の場合、「浜松に行く前」→「浜松の砂丘の演奏」→「セントマリア病院での演奏」→「演奏後、セントマリア病院を去る」と時間軸に沿って展開している。とりわけ、「僕」が大きく変容するのは浜松市のセントマリア病院で演奏を行ってからである。F・シュタンツェルのいう「なにかしら実存的に有意義な事柄」は、浜本純逸の（「Aが」）「何か（X）に出会う」に相応する。「何か（X）に出会う」ことによって主人公の「僕」が「大きく変容・変貌していく」のが文学作品の基本構造であるという点を踏まえて読むように指導したい。「私はこの話を読んでみて、作者の言いたいことが、いまいよく分かりませんでした」<sup>15</sup>と書いた中学2年生の女子生徒も文学作品の基本構造を手がかりにすると、主人公の「僕」が変容したのは何に出会ったことがきっかけになっているのかを理解できるようになり、作者の言いたいことがわかってくるだろう。浜本は「（主人公が）大きく変わっていく行為点を変換点」と捉えていて、この変換点によって、図に示したように（主人公の「A」がXに出会って）「Yのとき」に「Bする」ことで、「A」の行動や心情は大きく変化するのである。

これはキーンとズィーマーマンが『Mosaic of Thought』<sup>16</sup>の中で言及している「理解のための方法」の「何が大切か見極める」に即応する。キーンとズィーマーマンは「何が大切か見極める」ことは作品を理解するために有効であることを明らかにしている<sup>17</sup>。小説の学習で言うと、主人公の心情の変化は「何が大切か見極める」ことになるだろう。主人公が大きく変化する心情や行動には必ず意味があるので、主人公の心情や行動の変化が見られるところは小説の読みにおいて骨子となる。もちろん、小説の学習に必要なのは「何が大切か見極める」だけではないものの、キーンとズィーマーマンが挙げている「何が大切か見極める」ことは表面的な読みに留まらないためのひとつの方法になるであろう。「何が大切か見極める」ために、小説の学習の場合、主人公の「変換点」を押さえた上で、主人公は「どのように変わったか」という発問と、「なぜ変わったか」という発問にわけて学習者に考えさせることを提唱した浜本の見解は有益になる<sup>18</sup>。主人公の「僕」が「どのように変わったか」、そして「なぜ変わったか」を考えさせることが学習者にこの作品の読みを深めさせる指導になるためである。宮川健郎は「どのように書かれているか」は物語の表現や構造を読むことになると同時に、語り手について考えることにもなると言及している<sup>19</sup>。宮川の指摘は主に物語を指しているが、小説を指導する際にも当てはまる。「クリスマスの仕事」の表現や構造に注意を向けると、「どのように語れているか」について把握できるようになる。小説の表現や構造に注意を向けながら読むことは「どのように語られているか」を読む手解きになり、「僕」の心境の変化に気づけるようになるのである。

また、「クリスマスの仕事」を指導する際には、時間を経た現在になって「僕」はなぜ語っているのかという「僕」の語る動機を学習者に考えさせる必要があるだろう。婦長さんとマリコさんだけではなく、「僕」とマリコさん、「僕」と婦長さんとの関係性のみならず、「僕」の音楽に対する捉え方にも着目させて、「僕」がどのように語っているのか、加えて「僕」の語る動機についても考えることで音楽の素晴らしさという枠組みを超えた「クリスマスの仕事」の新たな読みを構築させたい。音楽の素晴らしさという枠組みに嵌め込まれた読みを超えるためには、この作品の場合、学習者に「僕」が大きく変容している場面に着目させて、「僕」が変化した意味合いを考えさせたい。学習者に「僕」の心境の変化を気づかせるポイントになるのが二回行われている「僕」の演奏である。「僕」がセントマリア病院で演奏する前に、浜松の砂丘でも演奏していることを考慮すると、浜松の砂丘の演奏とセントマリア病院内での演奏を対比するかたちで学習者に「僕」の変化に目を向けさせる指導を提案したい。二つの「僕」の演奏を対比することで「僕」がどのように変化していったかを学習者に考えさせることが要点になるであろう。つまり、「僕」が大きく変容する「変換点」あるいは「何が大切か見極める」ことの伏線になっているのが「浜松の砂丘の演奏」である。「変換点」や「何が大切か見極める」ことを考えるにあたって、伏線は読みを深める方法のひとつになる。伏線は後の展開に備えてそれに関連したある事柄を前もって示す表現技法である。換言すると、大切な事柄であるからこそ、前もって読者（学習者）に示唆しているのが伏線なのである。伏線は大切な事柄を前もって示している表現技法であるゆえに、「クリスマスの仕事」の場合、浜松の砂丘とセントマリア病院における二つの「僕」の演奏を対比することで、学習者は「僕」がどのように変化していったのかがわかりやすくなるのである。

### 3. 砂丘で演奏した時の「僕」の心境を伏線にした読み方

「僕」と室井は「フォルクローレのデュオを組んでいる」ものの、「フォルクローレはマイナーな民族音楽」ゆえになかなか演奏する仕事にありつけない。演奏の依頼がめったにないために「アルバイトをし」ているのだが、「三十になってもまだ六畳の風呂なしアパートに住んで」とてつもなく貧乏な生活を強いられている。「うなぎは大好物」なのに「うなぎなんて、もう味も忘れるほど食べてないよ。」という台詞から貧しい生活を過ごしていることがわかる。そのような苦しい境遇の中に「僕」がいる時、この作品のタイトルが「クリスマスの仕事」であるように、クリスマスイブにセントマリア病院からフォルクローレの演奏の仕事依頼されたことが「僕」の語り出す動機になっている。東京に住んでいる「僕」と室井が浜松市にあるセントマリア病院に行く途中で立ち寄った浜松の砂丘で演奏する様子が次の場面である。

「浜松砂丘」というバス停で、僕らはバスを降りた。（中略＝稿者）どんよりとした灰色の雲、灰色の海、そして人のいない砂浜。風、砂に刻まれた風の紋様。時間が止ったように感じた。「よっしゃ、記念に一曲、神様にクリスマスプレゼントだ。」室井がチャランゴを取りだしたので、僕はケーナを出した。（中略＝稿者）二人で「花祭」という曲を演奏した。

だあれもない砂丘に、ケーナ笛の音が風に乗って運ばれていく。海へ、海へ。そしてあつげなく、ざぶんという波の音に飲み込まれていく。どうやったら、波に消されないだろう、僕は波の音に合わせてケーナを吹いてみた。ざっぶんざっぶん、ざざざ……という波の、その不規則さの中の規則、それはなんだかフォルクローレに似てた。波の波形に乗ると、笛の音は海面を滑って上昇気流をつかまえ、空に昇っていく。灰色の空へ、空へ、空へ。高く、高く、高

く。そして気流の音と一緒にになった。瞬間、アンデスの山が見えた。

「アンデスの山が見えた」という表現について、先行研究では指導書の「落ち込んだ気分からの転換を示している」<sup>20</sup>という指摘、門澤の「『アンデスの山』とはフォルクローレの本質・真髄を象徴するもの」<sup>21</sup>という指摘がある。砂浜の波の「不規則さの中の規則」さを「なんだかフォルクローレに似て」といって「僕」が感じたのは、門澤の指摘にあるように波の「不規則さの中の規則」にフォルクローレの本質があることを「僕」が気づいたからである。波の「不規則さの中の規則」の音に合わせてケーナを吹いた時にフォルクローレに似ていると感じた「僕」について、門澤は「波と一体化することによりその真髄に迫っている」<sup>22</sup>と指摘している。確かに、「僕」の演奏が波と一体化して「気流の音と一緒にな」った瞬間だけはフォルクローレの真髄に迫りつつあるといえよう。だが、詳細に言うならば、フォルクローレの真髄である「不規則さの中の規則」を「なんだかフォルクローレに似てた。」という「僕」の「なんだか」という確定しない言い方や、南米アンデス山脈地方の民俗音楽であるフォルクローレの演奏中に「瞬間だけ」「アンデスの山が見えた」と語る「僕」からは、フォルクローレの真髄を掴んだと確信するまでには至っていない。浜松の砂丘で演奏した時の「僕」は「瞬間だけ」フォルクローレの真髄をつかんでいるものの、この時はまだ「瞬間だけ」でしかなかったのである。この時の「僕」はフォルクローレの真髄を見極められなかったものの、何かを掴みかけている最中であった。浜松の砂丘で演奏したこの時の「僕」の心境を伏線として捉えることで、セントマリア病院で演奏した後の「僕」の変化が把握しやすくなる。

#### 4. 文学作品の基本構造の「変換点」と対比を活用したセントマリア病院で演奏した時の「僕」の心境の読み方

浜松の砂丘に寄り道をしてから、「僕」と室井はセントマリア病院に到着して依頼されていた演奏をする。しかし、セントマリア病院での演奏は「僕」や室井が「呆然」とするくらい、これまでに経験したことがないものであった。演奏の聴衆は「二十床ぐらいのベッド」の上の患者さんたちであり、しかも「僕」にとって、患者さんたちは「僕らにだけじゃなくて、この世のすべてのものに無関心のように見える人たちであった。

「あの……、これ……。」室井が婦長さんを振り返って口籠もった。

「びっくりしたかしら。ご覧のとおり、この方たち、皆さん植物のような状態なの。」

「植物……状態？」婦長さんは、ごくごく当たり前の口調で笑いながら言った。

「そう。皆さん寝たきりの方々。目も見えないし、耳も聞こえないし、体を動かすこともできない……って、言われている人たちの。でもね、本当はどうか、誰にも分からない。そうでしょう、実は聞こえているけど応えることができないだけかもしれない。見えているけれども表現できないだけなのかもしれない。誰にも分からない。でもね、たとえ体の全ての機能が奪われ、意識がないように見えたとしても、こうして生きているってことは何かを感じてるってことじゃないか、って私は思うのよ。そう信じてるの。あなた方はどう思われます？」

どう思うと聞かれても、うまく答えられなかった。僕は、正直に言って、ちょっと怖かった。その人たちは、確かに普通の人間とはどこか違う印象を与える。なんていうか……、作りモノみたいだった。魂の抜けた人間って感じだったのだ。

「僕」と室井は「植物のような状態」の患者さんたちに違和感を覚え戸惑っている。これまで「普通の人間」に演奏してきたので、どうしていいかわからないのである。患者さんたちを「作りモノみたい」や「魂の抜けた人間」と感じる「僕」は、婦長さんの「生きているってことは何かを感じてるってことじゃないか」という言葉の意味を理解することができない。そのために「僕」は「うまく答えられな」いのである。婦長さんの「信じてる」ものは、この時の「僕」にとって理解し難いものであった。婦長さんは「交通事故に遭って、脳に傷を受けてしまった」けれども、「笛の音にだけは反応する」マリコさんを「何かを感じ」ながら「生きている」と信じている。交通事故によって脳に傷を受けたことが原因で失語症や失行症になるのは高次脳機能障害である<sup>23</sup>。わずかな言語もいえず、また目で反応さえ示すことができないマリコさんは高次脳機能障害の中でも重度の症状であるといえよう。高次脳機能障害に対する音楽療法の有効性の証明はまだ確立されていない<sup>24</sup>。それでも、重度の高次脳機能障害をもちながらも笛の音だけに反応して「まっげがかすかにけいれんする」マリコさんに「笛を吹いてくれないかしら」と頼む婦長さんの言葉から、「他のバンドが全部出払っていた」から仕方なくマイナーなフォルクローレの演奏を依頼したのではなかったことが読み取れる。婦長さんは「笛の音にだけは反応する」マリコさんがフォルクローレの音色に「何かを感じ」るのではないだろうかかと期待を寄せているのである。セントマリア病院で演奏した時、思いがけない出来事が起こる。

「婦長、マリコさん、これ涙じゃないかしら。」一人の看護婦さんが、声を上げた。婦長さんが駆け寄って、マリコさんの目頭をひとさし指でなぞってから、彼女の小さな頭を抱き締めた。  
「ほらね、分かるのよ。感じるのよ。」  
自分に言い聞かせるみたいに、婦長さんはつぶやいた。

マリコさんの目に「一粒にも満たない涙」があったのである。このストーリーから村山は「『ひたむきな演奏が人に思いを伝える』物語として見ようとする」傾向が学習者にあることを指摘している<sup>25</sup>。ここで（主人公の「A」がXに出会って）「Yのとき」に「Bする」ことによって、主人公「A」の行動や心情は大きく変化するという文学作品の基本構造を活用して「僕」の心情の変化を読み取りたい。「僕」はマリコさんに出会う前から音楽の素晴らしさをわかっていた。だからこそ、貧しい境遇であっても「僕」は音楽を続けながら生きてきた。「僕」にとって音楽は生きがいなのである。しかしながら、以前の「僕」は「演奏できることが楽しい」から「聴衆なんてどうでもいい」と考えていた。言い換えると、砂丘で演奏した時の「僕」は自分が楽しく演奏することを最優先にしている、聴衆のことなど考えていなかったのである。「聴衆なんてどうでもいい」と聴衆を「どうでもいい」存在だと語る「僕」の言葉には、演奏できる楽しみや喜びを自分だけが味わえたらいいという「僕」の自己中心的な考えが反映されている。これまで「僕」は音楽を通して他者に喜びや感動を伝えたいという考えを強く持っていなかったし、音楽が魂を自由にするなんて考えていなかったのである。自分が喜びを実感しながら演奏をしている点においてはいつもの「僕」と同じであるが、セントマリア病院で演奏した時の「僕」は、いつもと違って「人間の輪郭をした光」が「みんな自由にな」って「輝き浮遊し飛び回る」光景を幻視している点で異なっている。これは「僕」の演奏を聞いたマリコさんをはじめとする重度の言語障害や歩行不能の患者たちの魂が肉体を離れ、フォルクローレの音に合わせて踊っている様子が描かれている光景である。この光景を「僕」が幻視した時、「僕」は音楽には聴衆の心を揺さぶる何かがあることに気づくのである。

「クリスマスの仕事」の場合、マリコさんをはじめとする重度の言語障害や歩行不能の患者たちの魂が肉体を離れ、フォルクローレの音に合わせて踊っている様子を幻視した「僕」が音楽と一体化して、フォルクローレの真髄を掴んだ時が「変換点」にあたる。つまり、「僕」は音楽とは自分だけが楽しむのではなく、その音楽を聴く聴衆も楽しませたり喜ばせたりするものであることを認識するのである。ここに「僕」の変化を見ることができると、だからこそ、音楽は自分だけではなく、聴衆も喜ばせるためにあるのを認識した時、「僕の身体そのものが一本の笛となる」ように、「僕」は音楽と一体化したのであった。「僕」が音楽と一体化できたのはフォルクローレの音楽には魂が宿っていて、魂の宿っている音楽は聴衆の心に訴えかけるのを認識したことが要因になっている。魂が宿った音楽は人間の魂を解放し自由にすることを可能にする。浜松の砂丘では「瞬間」だけしかフォルクローレの真髄を掴めなかった「僕」であったが、セントマリア病院で演奏した時に「僕」はフォルクローレの真髄を掴めたのである。伏線にあたる砂丘での演奏や文学作品の基本構造の「変換点」に着目させて、これらに対比すると、学習者たちにとって「僕」の心境の変化が理解しやすくなるであろう。「僕」の心境の変化はこの作品を理解する上で大切なのである。

##### 5. 「クリスマスの仕事」とスーザン・バーレイ『わすれられないおくりもの』との重ね読みの有用性

セントマリア病院で演奏した時にフォルクローレの真髄を掴めた「僕」の変化に着目することは、この作品を理解する上で大切なところである。「僕」が変化したのは次の場面がきっかけになっている。

あの、砂丘の波のテンポを僕は思い出していた。上昇気流に乗せて、この笛の音を天上まで届けたい、その強い欲求が僕の中で竜巻みたいに湧き上がって、何か意識のドアを激しくノックする。もっともっと上まで音を届けたい。音は僕にとって魂だ。全ての魂を音に乗せて天上へ飛翔させたい、それが僕の唯一の望みだ。

何かがやってくる。音楽の神様がやってくる。それを僕は待っている。さあ来い、来い、来い、神様、どうか僕に降りてきて。僕は何もいません、ただあなたと踊りたい。ノックの音はさらに強く激しく僕を揺さぶる。開くぞ、開くぞ……、そう思ったとたんに、ばーんんと扉がはじけ飛んで、体がふわあっと軽くなった。すごく暖かな光を感じた。

気がつくと、僕の周りに、たくさんの人たちが集まって、踊っている。人間の輪郭をした光。輝き浮遊し飛び回る人型。楽しそうだ。みんな自由になれてとっても喜んでいるのが伝わってくる。そうだ、肉体なんて捨てて自由に踊ればいい。音楽は魂を自由にするのさ。フォルクローレは魂の音楽だもの。いつしか僕らは音楽に合わせて姿を変える。鷲に、花に、そしてコンドルに……。 (中略＝稿者) 今僕の身体そのものが一本の笛となる。 (傍線・稿者)

傍線部に示した箇所は特に学習者たちにとって、どのように解釈していいのかわからなかったり難しいと感じたりするところであろう。「僕」の音楽に対する見方が大きく変化するきっかけとなった箇所を学習者たちが把握していないために、1章で挙げたような「植物のような状態のマリコさんが涙を流したところで音楽って凄いなと感じた。」という感想になったといえる。この作品は音楽を通して「僕」のこれからの生き方が変わっているので、学習者の感想を素地としつつ、この作品の根本にある人生観や死生観について考えさせたい。そのためには傍線部分の描写を学習者たちに理解させる必要がある。それにはスーザン・バーレイ『わすれられないおくりもの』との重ね

読みが有用となるであろう。

スーザン・パーレイの『わすれられないおくりもの』は絵本として出版されている<sup>26</sup>ものの、教科書教材として『小学国語 3年』（教育出版）に収録されていた<sup>27</sup>。スーザン・パーレイの『わすれられないおくりもの』は、みんなから慕われているアナグマは死んでしまうのだが、アナグマはみんなと一緒に過ごした思い出だけではなく、それぞれの動物たちに生きるための知恵やみんなと助け合うことの大切さなどの生き方を伝えている。動物たちがアナグマの死を受け入れ、そして乗り越えながら前向きにこれからの人生を生きようとしているのは、アナグマがみんなに残したものの（おくりもの）が大きく影響している。アナグマが残してくれたおくりものを動物たちは人生の糧にして生きている。だから、動物たちはアナグマが残りしてくれたおくりものにとっても感謝しているのである。アナグマは動物たちの心の中で生き続けているのであった。次の場面は死期を悟ったアナグマの様子である。

アナグマは、死ぬことをおそれていません。死んで、からだがなくなっても、心は残ることを、知っていたからです。だから、前のように、からだがいうことをきかなくなっても、くよくよしたりしませんでした。（中略＝稿者）アナグマは、ぐっすり、ねいってしまいました。そして、ふしぎなでも、すばらしいゆめを見たのです。

おどろいたことに、アナグマは走っているのです。目の前には、どこまでもつづく長いトンネル。足はしっかりと力強く、もう、つえもいりません。からだはすばやく動かし、トンネルを行けば行くほど、どんどんはやく走れます。とうとう、地めんから、うきあがったような気がしました。まるで、からだは、なくなってしまったようです。アナグマは、すっかり、自由になったと感じました。（中略＝稿者）アナグマは死んでしまったのです。（傍線・稿者）

ここにはアナグマの体は自由に動くことができなくなっているのに、心は自由に動き回っている様子が表現されている。たとえ体が動かなくなったとしても、心は自由に動き回って解放されている。この時のアナグマは「どこまでもつづく長いトンネル」に向かっていた。すなわち、死の世界に向かっていたことを意味している。死んだとしても「心は残」り、その心は解放されるのである。アナグマは死んでしまうのだが、動物たちに人生の糧（おくりもの）を残している。「クリスマスの仕事」では、マリコさんを初めて見た時の「僕」は「魂の抜けた人間」として生きている人間にはどうしても見ることはできなかつたけれども、マリコさんは「僕」やセントマリア病院の婦長さんたちに魂の力を確信させることができた贈り物をしている点で近似している。『わすれられないおくりもの』を重ね読みすることで、体が動くことなく話すこともできず、まるで生きているようには見えない植物人間であっても心（「クリスマスの仕事」では魂）は確かに存在し、自由に動き回っていることが描かれているのを理解しやすくなる。「クリスマスの仕事」に即して言うと、マリコさんが植物人間になってしまい、生命のある人間のように見えなくても、魂は自由に動き回り、そのことがマリコさんの生きている証となっている。「クリスマスの仕事」の「僕」がマリコさんをはじめとする患者たちの魂が自由に踊っている姿を幻視したことが、音楽に対する見方、ひいては死生観や人生観を変えたのである。このことがこれからの「僕」の生きる糧になっていく。

「僕」が変化するきっかけとなる場面、すなわち、演奏を聞いたマリコさんをはじめとする重度の患者たちの魂が肉体を離れ、フォルクローレの音に合わせて踊っている様子が描かれている光景を学習者たちがどう解釈しているのか困難な場合、スーザン・パーレイ『わすれられないおくりもの』

との重ね読みは有用になると考えられる。

## 6. 「クリスマスの仕事」の教材的価値の検討

音楽を通して、たとえ植物人間であっても、魂は存在し、人間として生きていることを実感した「僕」は次のように語っている。

ああ、きっとこの人は、ときおり不安を感じながら、それでも魂の力を信じよう信じようって、そうやって生きているんだなあって思った。きっと、このセントマリア病院に働くみんなにとって、マリコさんの一粒にも満たない涙が、最高のクリスマスプレゼントなんだな、って思えた。おもしろいよな、人生って。与えている人たちが、実は与えられているんだな。うまくできてる。

ここには婦長さんの「信じてる」ものを理解できない「僕」の様子は見られない。マリコさんやセントマリア病院の患者たちを「作りモノみたい」や「魂の抜けた人間」と見做していた「僕」はもういない。マリコさんの魂の力を信じる婦長さんの信念を「僕」は理解できたのである。婦長さんは「ときおり不安を感じながら」もマリコさんの魂の力を信じて生きてきた。婦長さんが信じて生きてきたことの証がマリコさんの涙である。「マリコさんの一粒にも満たない涙が、最高のクリスマスプレゼント」であると感じたから、「僕」は「やっぱり神様はいるんだ。僕はそう思う。」と語ったのである。マリコさんの涙は「生きているってことは何かを感じてるってこと」の証であり、そのことを信じ続けた婦長さんの強さを証明するものでもあった。「僕」にとって音楽は生きがいであったことに間違いはないけれども、「ずっとこのままのような気もするけど、それもいいかな、なんて思っている。」とあり<sup>28</sup>、「僕」はどこか漠然と音楽に接していた。しかし、「僕」はセントマリア病院での演奏をきっかけに自分の演奏する音楽にはフォルクローレの魂が宿っていること、そして魂の宿る音楽は聴衆の心に響くことを認識し、自分の音楽に自信をもてるようになる。マリコさんの魂の力を信じる婦長さんの姿に後押しされて、「僕」は音楽の魂の力を信じて生きようと決意するのである。「僕」はこれまでの生き方を見直し、新たな「僕」へと変貌したのである。「僕」の生き方を変えてくれたのがセントマリア病院でのクリスマスの仕事であった。

「与えている人たちが、実は与えられているんだな。」という「僕」の言葉には、マリコさんと婦長さんとの関係だけではなく、自分と自分が奏でる音楽、そして自分と自分の演奏を聴く聴衆との関係性も含まれている。「なんかさ、気持ちよかったね。」という「僕」の言葉は、音楽を通して聴衆に喜びや感動を伝えられることの大切さを実感できた「僕」の気持ちを表している。「僕」が「やっぱり神様はいるんだ。僕はそう思う。」と語っているのは、涙で感動を伝えたマリコさんや、マリコさんの涙に自分の「信じてる」ものを確信した婦長さんを通して、生きることは互恵的な関係であることを認識したからであった。健全な人間でなくても、人間として生きている限り、生きていることに意味があることを「僕」は理解したのである。「やっぱり神様はいるんだ。僕はそう思う。」の言葉には思いがけず大好物の「うなぎ弁当」が与えられた喜びも含まれているだろう。「僕」はクリスマスの仕事を通してフォルクローレの演奏の仕事だけではなく、音楽の素晴らしさ、フォルクローレの真髄、人間に宿る魂の力、人間は互恵的な関係で生きていることに気づかせてもらうという神様からの恩恵を受ける。しかも、食べたくても貧乏なゆえに食べられなかった大好物の「うなぎ弁当」まで贈られた「僕」は、クリスマスの仕事を通して「やっぱり神様はいる

んだ。僕はそう思う。」と確信するに至ったのである。つまり、「クリスマスの仕事」は「僕」が「無信仰」である冒頭部分と、「僕」が神様の存在を確信する結末部分は照応する作品構造になっている。この作品は決して音楽の素晴らしさだけを語っているわけではない。「クリスマスの仕事」というタイトルには「僕」・マリコさん・婦長さんの三者それぞれの生き方が収斂されている。その中でも音楽の魂の力を信じてこれから生きていこうと「僕」が決意したのが、このクリスマスの仕事であったことの意味合いは大きいのである。

実は、田口ランディは「クリスマスの仕事」が以前自分の「住んでいた隣のアパートの住人であった」「フォルクローレのケーナを吹く青年」をモデルにしている、「小説の内容も事実に基づいている」ことを明かしている<sup>29</sup>。しかし、モデルになった青年は「寝たきりの植物状態の人の前で演奏した」時に、「寝たきりの人でも音楽」は「わかると思うよ。みんながじっと聴いていた気がしたもの」（傍点・稿者）と憶測を話しているだけに過ぎない<sup>30</sup>。マリコさんや婦長さんは田口ランディが作り上げた架空の人物である。また、モデルになった青年はセントマリア病院で演奏した時にフォルクローレの真髄を掴み、音楽の魂の力を確信した「僕」と同一の人物ではない。すなわち、フォルクローレの演奏をしている青年が「寝たきりの植物状態の人の前で演奏した」という「事実に基づい」たとしても、それは素材でしかない。素材をもとにして作者はそこに自分の思いの丈を読者に伝えるべく工夫を凝らし、小説として新たに作り出している。

「クリスマスの仕事」には、「人は『生きている』と同時に『生かされている』。分かち合うことでそれを学んでいく。」ということを改めて考えてみてほしいという作者のメッセージが込められている<sup>31</sup>。この作品は「無信仰」だった「僕」が「やっぱり神様はいるんだ。」と神様の存在を確信するまでを回想しながら語るという作品構造になっている。「僕」が神様の存在を確信するに至ったのは「魂の力」に気づいたことによる。田口ランディは「『なにもしない』人は『生きている意味がない』ように感じている自分に気がきました。」「そう思っている自分がいたことに長らく気づくことができませんでした。」<sup>32</sup>と植物状態の人間に対して自分が浅はかな考えを持っていたことを告白している。このランディの告白は、たとえ植物状態の人間が症状のために何もできなかったとしても魂は宿っていて、人間には必ず生きている意味があるということを私たち読者に問うている。植物状態の人間が何もできなかったとしても魂は宿っていて、人間には必ず生きている意味があることを示しているのが、重度の言語障害や歩行不能の患者たちの魂が肉体を離れ、フォルクローレの音に合わせて自由に飛び回りながら踊っている様子を「僕」が幻視する場面である。ここには植物状態の患者たちにも魂が存在して、その魂は自由で解放されていることが描き出されている。患者たちに魂が宿っていることを「僕」がわかったのは、マリコさんの涙であり、婦長さんの「生きているってことは何かを感じてるってことじゃないか」という言葉であった。生きている患者たちを「作りモノみたい」や「魂の抜けた人間」だと見做していた「僕」が、何をきっかけにして患者たちは生きていると認識したのかを学習者に考えさせたい。さらに生きていることが互恵的な関係であると「僕」が理解したのはどのような出来事を通してなのかということについても併せて考えさせたい。そのことが「クリスマスの仕事」の「変換点」であり、また「何が大切か見極める」ことになる。

本稿は文学作品の基本構造・伏線・対比・重ね読みといった多角的な観点から「クリスマスの仕事」の教材的価値を検討してきた。小説を読むための文学作品の基本構造・伏線・対比の方略や重ね読みを活用することで、小説の読み方を学びながら「僕」の変化がわかるようになる。「僕」の変化は作品の骨子の理解となることから、作品の内容の側面だけではなく、「クリスマスの仕事」

は教材としての価値を十分に備えている。中学2年生の学習者にとって読む力の育成だけではなく、死生観や人生観について作品を通して考えることになる点においてもこの作品の教材性が認められる。本稿は文学作品の基本構造・伏線・対比の方略と重ね読みを提案したが、学習者たちの理解に応じて、それぞれの方略を取り入れながら「クリスマスの仕事」の読みを深める指導を実践していきたい。

#### 【注】

- 1 本稿は学校図書『中学校 国語2』（2012年）の「クリスマスの仕事」から本文を引用している。教科書の「クリスマスの仕事」は初出を省略・改変しているため、教科書に載っていない箇所は初出である幻冬舎のホームページの「クリスマスの仕事」及び『ソウルズ』（角川文庫、2007年）に収録されている「クリスマスの仕事」から文章を引用していることをお断りしておく。なお、「クリスマスの仕事」は来年度の平成28年度の中学2年生の教科書にも引き続き掲載されることになっている。
- 2 学校図書ホームページ「出典」<http://www.gakuto.co.jp/hikokugo/sakuhin02/008c.html>（2015年5月現在）
- 3 村山太郎（2008）「〈自分らしさ〉を迫る時代の国語の学習」、『国語教育研究』（49）、広島大学国語教育会
- 4 門澤功成（2008）「田ロランディ「クリスマスの仕事」の注釈的な読み—抽象的なテーマをもつ作品による中学2年生対象の授業報告—」、『早稲田 研究と実践』（50）、早稲田中・高等学校編
- 5 原田正彦（2011）「田ロランディの「クリスマスの仕事」をどう読むか—中学校の小説教材の読解方法—」、『実践教育』（29）、実践女子学園中学校・高等学校中等教育研究室
- 6 注3に同じ p.112
- 7 注3に同じ p.112
- 8 注3に同じ p.112
- 9 学校図書編集委員会「クリスマスの仕事 田ロランディ」（2012）、『中学校国語教師用指導書 中2教材研究編』、p.134
- 10 吉田新一郎（2010）『「読む力」はこうしてつける』、新評論、p.36
- 11 F・シュタンツェル（1989）『物語の構造』（訳・前田彰一）、岩波書店、p.217
- 12 注11に同じ p.87
- 13 浜本純逸（1992）「対話への文学教育」、『日本文学』41(3)、日本文学協会、p.13
- 14 注13に同じ p.124 浜本の基本モデルを参考に作成した図であることをお断りしておく。
- 15 村山太郎氏による師範授業を観察した実習生の記録を中心に纏めた『広島大学学部・附属学校共同研究機構 研究紀要2012 これからの教育実習—国語科における観察実習の研究（2）—資料集』（広島大学研究科国語文化教育学講座、広島大学附属福山中・高等学校国語科編集、2011年3月）に田ロランディの「クリスマスの仕事」の学習者の感想文が収められている。本稿はp.13から引用している。
- 16 Keene Ellin and Susan Zimmermann, *Mosaic of Thought*, 2nd Edition, Heinemann, 2007. キーンとズィーママンの『*Mosaic of Thought*』（2007）の中の7つの「理解のための方法」の項目については山元隆春（2014）『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』（溪水社）の訳から引用していることをお断りしておく。
- 17 注16に同じ pp.208-209 キーンとズィーママンの『*Mosaic of Thought*』については吉田新一郎（2010）も著書の中で詳細に論じている。ただし、吉田の訳では「理解のための方法」ではなく「優れた読み手が使っている方法」と表現されている。
- 18 浜本純逸（1996）『文学を学ぶ・文学で学ぶ』、東洋館出版、p.185

- 19 宮川健郎（2013）『物語もっと深読み教室』、岩波書店、pp.56-57
- 20 注9に同じ p.140
- 21 注4に同じ p.76
- 22 注4に同じ p.76
- 23 藤田郁代・関啓子編（2009）『標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学』、医学書院、pp.2-5
- 24 佐藤正之（2011）「高次脳機能障害と認知症に対する音楽療法」、『神経研究の進歩』63(12)、医学書院、p.1371
- 25 注3に同じ p.112
- 26 スーザン・バーレイ作・絵、『わすれられないおくりもの』（訳・小川仁央）、初出は1986年10月、評論社である。
- 27 確認したところ、平成8年度から平成17年度版教科書にスーザン・バーレイ『わすれられないおくりもの』が小学校3年生の国語の教科書に収録されている。なお、本稿はスーザン・バーレイ（2014）『わすれられないおくりもの』（評論社）から引用していることをお断りしておく。
- 28 「僕」が「ずっとこのままのような気もするけど、それもいいかな、なんて思っている。」と語っている箇所は教科書では省略されている。初出や『ソウルズ』（角川文庫、2007年）の中で確認することができる。
- 29 田口ランディ（2006）「「クリスマスの仕事」について」、『教科研究』（181）、学校図書、p.2
- 30 注29に同じ p.4
- 31 注29に同じ p.4
- 32 注29に同じ p.4

（広島大学）